

第三十二回和辻哲郎文化賞 一般部門受賞作

白川 方明 著 『中央銀行 セントラルバンカーの経験した39年』

(2018年10月25日刊 東洋経済新報社)

白川方明 しらかわ・まさあき 青山学院大学国際政治経済学部特別招聘教授

1949年(昭和24年)9月27日生まれ 70歳 福岡県北九州市出身

専門は中央銀行論

1972年(昭和47年)3月、東京大学経済学部卒業(学士取得)。同年4月、日本銀行入行。1977年(昭和52年)6月、シカゴ大学大学院経済学部修了(MA取得)。2002年(平成14年)7月、日本銀行理事。2006年(平成18年)7月 京都大学公共政策大学院教授。2008年(平成20年)3月、日本銀行副総裁・総裁代行。同年4月、日本銀行総裁(2013年3月まで)。2013年(平成25年)10月、青山学院大学国際政治経済学部特任教授。2018年(平成30年)10月、同特別招聘教授。この間、BIS理事会副議長(2011年1月~2013年3月)。2020年2月現在、Group of Thirty (G30)メンバー。主著に、『現代の金融政策』(日本経済新聞社、2008年)、共著に、香西泰・白川方明・翁邦雄『バブルと金融政策—日本の経験と教訓』(日本経済新聞、2010年)がある。

受賞のことば

私の本は政治・経済という究極的な現実世界の中で自らが経験した「格闘」を扱っている。今回の受賞は、高名な倫理学者である和辻先生のイメージや過去の受賞作の立派な学術的業績に連なると、大いにミスマッチ感があると自覚しているが、それだけに受賞は大きな喜びである。本を執筆した目的の一つは、私が職業人生活を送った1970年代以降の同時代史—バブル、バブル崩壊、金融危機、デフレ、人口減少等—を書くことであった。国全体としても組織としても個人としても、成功も失敗もあった。「時代の空気」が冷静な論議を歪める怖さを感じることも多々あった。総裁在任中は民主主義社会における中央銀行のトップの真の責任とは何かを常に考えた。「History とは His Story」という言葉を聞いたことがあるが、私の書いた同時代史もその性質を帯びると認識している。それでも、将来の世代—形は変えつつも同じような問題に直面するだろう—が何がしかのヒントを求めて私のささやかな本を手にすることがあれば望外の幸せである。

《選考委員評》

阿刀田 高

確かな記録、入念な思案

著作の冒頭は静かに綴られている。2013 年春、いよいよ日本銀行総裁の職を退任する前日、著者は小石川の植物園に赴く。日ごろより時折訪ねるところだったらしい。桜がそろそろ咲き始めていた。園内の売店でソフトクリームを注文すると、同年輩の女性が温かいコーヒーをサービスしてくれた。公職にある身として人からご馳走になることを極力控えてきたのだが、この厚意をありがたく受けることとしたとか。微妙な解放感。売店の女性の親切がうれしかった、とある。700 ページを越える力作『中央銀行』を、私としては、

—— なるほど。あの出来事はこういうことだったのか ——

と読み解き、しかしその判断は経済界の実情にうといで、

—— どう評価したらよいか ——

知識の不足を嘆きながらページを操った。

どのページにも詳細な情勢分析と緻密な思案と厳しい決断が溢れている。すべてがこの国の経済に、私たちの生活に関わっているのだ。41 年の日本銀行員、五年の総裁職、心身の負担は大変なものだったろう。その実際を読みながら、わけもなく、しばしば冒頭の植物園での解放感に思いを馳せ、そこだけはよくわかった。

第一部『日本銀行でのキャリア形成期』、第二部『総裁時代』、第三部『中央銀行の使命』、すべて重厚で入念な記述である。私的な記述にも納得がいくし、日本経済の記録としての価値もすこぶる高いだろう。充実した読書とはなったが、多くの記述には異論もあるにちがいない。この方面につまびらかな諸氏の意見に耳を傾け、授賞に賛成した。

これまでの和辻哲郎文化賞としては（政治経済をテーマとするものは少ない）異色ではあったが、新しい判断として十分に配慮されてよいものと思った。白川さん、ご苦労さまでした。おめでとうございます。

辻原 登

カネ
貨幣は言語と同じように幻想の領域にありながら、私達の唯一の現実を作っている。何とも悩ましい事態ではあるが、これが人間界なのだ。そして、今やこのこと（幻想性）が剥き出しになり、仮想通貨、例えばリブラがグローバリズムの大波に乗って世界を席捲しようとしている。

仮想通貨については直接触れられている訳ではないが、カネの最初の貸し手、最後の貸し手である国の中央銀行が、グローバリズムの防波堤となって、カネの貸し借りのシステム＝金融をなんとか人間の制御のもとに置こうと奮闘している、そういう様子が、白川氏のこの本からくっきり浮かび上がって来る。

枕にでもなりそうなくらいぶ厚く難しそうだが、読み始めれば、文は平易明晰、論議は懇切丁寧に尽くされるから、金融、政治、経済に素人の我々でも面白く、まさに巻^{かん}を措^おくあたわざるの勢いである。

それはそうだ。白川氏の日銀総裁就任は2008年4月で、9月にリーマン危機という猛烈な暴風雨が襲来、2010年には欧州債務危機勃発、2011年3月11日に東日本大地震・大津波、福島第一原子力発電所のメルトダウン、しかもその間、自民党の歴史的な大敗北、続いて今度は政権を担ったばかりの民主党の大敗北とまさに激動^{さなか}の時代。暴風雨の最中に白川氏は、セントラルバンクのトップだった訳だから、国がどんな深刻な危機の渦中にあっただのか、それを知るだけでも、われわれは随分賢く、強くなれるし、希望を見出すことも出来る。

書くに当って、「時代を再現すること」に努め、民主主義の下における中央銀行のあり方に関心を持つ一般市民の読者を念頭^{あとちえ}におき、後知恵にもとづく記述を可能な限り避けた、とある。成程、用意周到な叙述ぶりで、「時代」がリアルに迫って来て、全篇に清々^{すがすが}しい風が通る。

はたん
破綻した日本長期信用銀行の大野木克信元頭取の墓参に訪れた『フィナンシャル・タイムズ』のジャーナリストの文章の引用と白川氏自身のコメントや、総裁を退任した翌日、散歩の途次、小石川植物園で売店の女性から振る舞われた“一杯のかけそば”ならぬ“一杯のコーヒー”のエピソードなど、氏の温かな人間性も窺えて、印象に残る。

我々は、和辻哲郎文化賞^{ふさわ}に 適^{ふさわ}しい作品を得た。

“白川マジック”の魅力

白川方明氏の日銀総裁就任は自民党と民主党の政権交代が起きなければ実現しなかったかもしれない。白川氏はその任期を「激動の5年間」と呼んでいる。総裁就任直前の米国のサブプライムローン問題という形で表面化した国内危機は、グローバル金融危機に発展拡大していった。総裁就任後の2010年には欧州債務危機が深刻化し、放漫なギリシア経済がついに破綻する劇的な瞬間をリアルタイムで見ることになった。本書は、世界経済史でも有数の危機の局面に中央銀行総裁となった白川氏がバンカーとしての冷静な眼力と、経済学者たる犀利な分析力を駆使して、39年間の日銀生活と5年間の総裁任期を回顧したものだ。

本書を読んで分かることは、中央銀行総裁に必要な資質は歴史家的な洞察力である。グローバル金融危機の深刻な影響を日本が経験したバブル崩壊以降の経験から予想するのは、歴史家として比較の視点をもつことにつながる。しかし、グローバル金融危機の実際の広がりや深刻さが予想を超えていたと率直に告白するあたりは、歴史の進行が人間による未来予測をはるかに越える厳しさを物語っている。たとえば、東日本大震災の対応の重要性については明確な自覚を持ったにしても、津波による事故や福島原発の事故は想像を絶するものだったと語る。中央銀行として最善最適の政策とは何か、そこには政争やけれんものが入る余地がない。それこそ中央銀行の独立性というものだろう。

バンカーと経済学者の両面が結合した文章は一見すると、数字と専門用語が頻出する専門家の論文といった印象を与える。しかし、読者もじっくり腰を据えて読めば、次第に“白川マジック”ともいえるべき独特な言い回しや、淡々としていながら剛直な筋の通った文体に魅せられるだろう。歴史の解釈者であるばかりでなく、歴史の「作り手」ともなった人物の静かな筆致は、和辻哲郎文化賞にふさわしく品位と迫力にあふれている。